
タイラントと異界の魔女

水里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイラントと異界の魔女

【Nコード】

N9445G

【作者名】

水里

【あらすじ】

巻き込まれて落っこちて、目覚めたら妹はいなかった。っていうのが、八年前の話。

天の巫女なんて呼ばれてる妹。単にそのオマケで召喚されたらしい姉。ただひとつ違ったのは、落とされた時間だった。

王道ハーレクイン目指して挫折しっぱなし異世界召喚ファンタジー。

レディ・ジェネラルと御伽の国（前書き）

注意）

内容に暴力・流血・虐殺・メタ・サブカルネタ・邪神等を含む

レディ・ジェネラルと御伽の国

そのころ、王都に住まう人々の間でもっぱらの噂になっていたのは、レディ・ジェネラルと呼ばれる魔女でした。

かの魔女は魔王の客人でありました。レディ・ジェネラルは、ですから、名前のとおりにな將軍というわけではないのだそうです。ですが、どちらにしたらって人々には同じことです。魔王といえ、人間の敵と決まっています。

ロードアイランドは御伽の国。魔物はすべて敵で、悪なのです。ですからもちろん、魔女だって悪なのです。

もつとも、魔女狩りなんていう野蛮なことはこの国にはないので。なぜなら、魔女は人知を越えた存在なのです。そんなものに、いくら頭数がいたところで普通の人が敵うはずがありません。人々は、魔女がどれだけ恐ろしいか、よく知っていました。

魔女は、食べ物をくさらせるだとか、家畜が子どもを産まないようにするだとか、そんなどうでもいいことはしないのです。ただのひとりで騎士の大軍と渡り合い、腕のひとふりで滅ぼす。「そういうもの」が、魔女なのです。

ですが、ここ数百年というものの、魔女が姿を見せることはありませんでした。

もしかしたら、市井にまぎれた魔女はいたのかもしれませんが。歴史に名を残すような魔女は、いませんでした。

魔王にはたくさん部下がいますが、その中に魔女はいません。魔族と魔女は別のものなのです。魔女というのは、かつて人間だったものなのです。いえ、今だって人間なのかもしれません。ですが、あまりにも大きすぎる力を持ってしまったひとを、人間とは呼ばないものです。

そういうわけで、レディ・ジェネラルは数百年ぶりにあらわれた

魔女なのでした。

魔女の名前は知られていません。魔王みずから、レディ・ジエネラルと呼ぶのだそうです。彼女と戦った騎士たちは、みな、同じことを言いました。とても、魔女には見えなかったと。

おさない少女のようにしか見えなかったのだと、言いました。それこそ魔女のねらいに違いありません。子どもと見れば、やはり誰でも戦う気をそがれるものです。まして非力な少女です。そんなものがおそろしい魔女だと、思えるでしょうか。

きつと本当は、大きないぼのついた長い鼻（たとえば、お鍋のスプをかき混ぜることのできるような、です）を持った、腰の曲がった老婆に違いありません。魔法でそんなふうに見せているのでしょうか。

それとも、魔女は年を取らないのかもしれませんが。なにしろ、レディ・ジエネラルは時間をあやつるらしいのです。どちらにしたって、見た目とはかけ離れた年齢であることには違いありません。そうしてそれは確かに正しかったのですが、うわさ話に花を咲かせる人々には、知ることさえもできないことでした。

だいたい、本当はどうかなんてどうだっていいのです。ただ、みんな、暇がまぎれさえすればよいのです。

なんといつても、魔王が王国に攻めてくることはないのですから。

王国の北に、アイルズベリイという小さな小さな村があります。

いいえ、ありました。村にはもう、誰も住んでいないのです。

村を越え丘をふたつ越えると、その先は大きな大きな森です。迷い込んで、生きて帰った者はほとんどいません。それに魔物が出るおそろしい森です。でも、森にさえ入らなければ魔物に襲われることはないのです。

その森を更に越えると、肥よくて広大な土地があるのだといいます。そこに魔族たちが暮らしているのだということは、ロードアイ

ランドの者ならば誰もが知っていました。

ロードアイランドは小さな小さな国です。

そんなにすてきな土地があるというならば、森を焼き払っても手に入れないのです。でも、魔族のふしぎな力によって、それはいまだに叶っていませんでした。

それに、代々の王さまたちが何度も戦いを挑んでも、魔王は強く敵わないのです。アイルズベリイも、とうとう戦場になりました。それきり、人が住みつくことはありません。

いったいいつになったら、勇者があらわれて魔王を倒してくれるのでしょうか。

一章（一）

大体、私っていう人間の本质はいい加減なものなのだ。流されるままにしていれば、そりゃ楽である。

もつとも、そうやって流れつく先は、どう考えたって良いところだとは思えないけれど。

なんだろうこれってというのが、そのときの正直な気持ちだった。

だって私は直前まで、妹の部屋にいたんだから。　　そう。妹と、いたのだ。私はきつと、生涯忘れることができないだろう。

光の奔流。伸ばした手。つかんだと思ったその瞬間、うしなつた指先。

きつと一生忘れない。つないだ手を離してしまったこと。

どうして。でも、自分を責めるのは後回しにした。何しろ、ここがどこだか分からなかった。それ以前の問題だ。映画の撮影にしては、それはあまりにもリアルすぎた。

頭で理解するより、嗅覚が先だった。

後にも先にも、あんなに臭かったことはない。肉の腐った臭い。咽かえるような。思わず鼻をつまんだ。壮絶に臭かった。

その臭いの元が何かなんて、気づきたくなかった。でも気づいてしまったものはしょうがない。

まるで現実味のない光景。まるで映画の戦場。いたるところ転がっているのは、かつて人間だったものの成れの果てだった。腐臭に混じる、鉄錆の臭い。赤ではなく、黒。その場所はとうに終わっていた。私にできたことといえば、とりあえず頬つぺたをつねってみるくらいだった。

夢の中にだって痛覚が存在することは、よく知っていた。単にべ

々な行動を取って見た、というだけだ。あまりのことに、頭が真っ白だったのだ。人間、理解の範疇を超えると何もできなくなるものである。

もちろん、現代日本に生きる女子大生の私に、何ができたはずもない。幸いにも、すでに虐殺は終わって久しいようだった。少なくとも数日は経過していた。いやだって、腐ってた。臭かった。

とりあえず身の安全は証明されたが、合戦場跡になんか好き好んで居たくもない。当然、私が異世界に来てまず最初にやったことといえば、さつさとその場を離れ ようと、華麗なターンをすることだった。いや、本当に一番最初にやったのは鼻をつまむことが。罰当たりと言わば言え。

今ならともかく、何せその当時の私は平凡で平均的な日本人女性だったのだ。いや嘘です。あんまり平均的でもなかった。主に、腕力とか膂力とかいうあたりが。人間頑張れば素手で犬の首くらい飛ばせるのだ。なお、本作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件・HP・エンペラーなどには関係ありません。いくら頑張っても人差し指と中指だけで耳を飛ばすことはできませんのであしからず。

とりあえず、その程度には馬鹿力だと理解してもらえばいい。まあ、あまり平均的な日本人女性とは言えない。言えないけど言うだつてそれ以外はいたつて平凡なんだから。残念なことに美人でもなければ優秀でもない。

まして何か不思議な力があるとか魔法が使えるとかシックスセンスとか超直感とか、あと神子とか神子とか巫女とかそういうわけでもない。状況はあまりにも異世界迷い込みのパターンそのものだったが、普通は戦場ど真ん中とかには呼ばれないものだ。そういうのは大体お城の中とかお城の近くの森とかそついうところに呼ばれるものなのだ。よって問題外。

つまり勇者として召喚されたなんてわけもなく、単に落っこちたというのが正しいのだろう。こういうのを神隠しって呼ぶのかしらと、私は相当にのん気なことを考えた。もしも時間が巻き戻せるなら、あのときの自分に言っただけでいい。緊急にその場から退避せよ、と。

いたって真つ当で良識的な唯物論者であるところの私は、だからもちろん予想もしてみなかった。

まさか自分が、魔法使いの弟子になるなんてこと。

どころか、その数年後には魔女と呼ばれて恐れられてるなんてことは、知るはずもなかった。

華麗なターンあらため、ごくごく普通に背後を振り返った私の目に最初に飛び込んだのは、どうやら人間とおぼしき男性の胸元だった。いや、びっくりした。

びっくりしてる場合じゃなかった。

一章（二）

男はクロウと名乗った。魔法使いだと。迎えに来たと言った男の手を、私は取った。それ以外に縋るものなどなかったから。

今でも、失敗だったと思っっている。

第一縋るといふのがよろしくない。私には立派な二本の足がある。人並み以上には丈夫な体がある。たいした働きはしないけれどもまあ、それなりの頭だつて持っている。何より、私は知っていた。

本当は私はどこへだつて行けるのだ。

それはもちろん、帰る家があるからこそその確信だとも知っていたけれど。

でもそうも言つてられなかった。とにかく必死だったのだ。だつてそのままそこにいたら、確実に飢え死にだ。いくら私だつて腐った肉は食べたくない。いやそれ以前の問題で、ヒトガタをしたものを食べたいとは思わない。

言葉は通じるらしいから、この際何とでもなるだろう。そう思ったのが間違いだつただけで、あの頃の私が知るはずもない。

かくて運命の輪は巡りはじめ、私はカラストロフへの一步を踏み出した。これを喜劇と呼ばずして何と呼ぼう。ああまったく、喜劇にしかなりようがないのだ。この私が異世界トリップなんて物語の主人公みたいなことをしたところで、悲劇にもシリアスにもなりようがない。せいぜいコメディがいいところ。私は主人公の器ではないし、それに正義の味方より悪役の方が好きなのだ。

いや、正義の味方は正義の味方で好きだけれど。例の自分の頭を他人に食わせる正義の味方なんか、最高だ。最高に狂ってる。あれ以上の狂気はちょっと知らない。アニメはともかく、初期の絵本のハードボイルドっぷりは異常なほどだ。

日本人なら分かると思うけれど、私もご他聞に漏れず判官びいきの気がある。

ただし、悪役に綺麗なだけの悲しい過去なんて要らない。改心なんてしなくていい。後悔なんてするべきじゃない。悪役は悪役のまま、最後まで一本筋を通して悪を貫けたなら拍手喝采、だ。悪の美学っていい言葉だね。死ぬまでについていうか死ぬときに一度は言ってみたいせりふ、「謝るなよ 偽善者」ああ、ゾクゾクする！
まあ、そのあとホイホイ生き返っちゃったのはどうかと思うけどね。好きだけど。でもどうせなら潔く散りたいものだ。

何が言いたいかって、ちょっと、奥さん聞きました、私ってば悪役らしいよ。

まあそういうわけだ。何がそういうわけなのかは聞いてはいけない。

ロードアイランドは御伽の国、なのだそうだ。クロウの受け売りそのまんまだから、真偽は知らない。知らないけど、体感して理解した。

ロードアイランドは御伽の国。フェアリーテールでもメルヒエンでもなんでもいい、おとぎ話っていうのは意外と、しょっぱくもせちがらいものなのだ。つまり、その枠内で生きるものにとっては。うん、なんだかそう言うとおれだ。どっかのファンタジーの皮がぶったミステリーみたいな。何を隠そうこの私も長女である。美人三姉妹ではないが。

だけど私は物語のヒロインの主演ではない。私の魔法使いはもういない。

私は知っている。現実とか世界とかいうものは、かくも理不尽なのだ。お前の存在自体が理不尽だ、というのは言っではいけない。挿すよ。背後から。ちなみに変換間違いではない。うん、脳内一人

ツッコミって私、かわいそう。

私はクロウに出会って、魔法使いの弟子になった。もう、八年も前のことだ。

そうして今は、魔女と呼ばれている。

魔女というのは人知を越えた人外存在、らしいがどうも実感が湧かない。というか正直どうでもいい。重要なのはただのふたつ、ロードアイランドが御伽の国で、魔法使いは国家資格だったことだけだ。夢がない。しょっぱい。せちがらい。こんな御伽の国は嫌だ。だが現実なのだから仕方ない。

もちろん、この私がそんな倍率すごそうな資格など持っているはずもない。これから私のことはブラックジャックと呼んでくれたまえ……悪役は悪役でも、残念ながら大変地味な悪役だった。要するにただの犯罪者だった。かわいそうなことこの上ない。格好良さとかは皆無だ。

だから最初から言っているのだ。私は主人公の器ではない、と。

魔法使いと弟子

魔法使いには弟子がひとりおりました。

弟子は、異界の人間でありました。

童子めいた容貌の、幼げな女性でありました。

異界の人間だけが異能を持っていることは、きちんとした魔術師ならば誰でも知っています。もちろん、魔法使いも知っていました。弟子を取ろうと思ったのは、そのためでしたから。

ですからはじめ、魔法使いはとまどいました。

彼女はとても、幼く見えたからです。子どもはいけません。魔法使いは子どもが苦手でした。でもそれは、心配するまでもないことでした。

私と来ますか、と魔法使いはたずねました。

ええ、と彼女は答えました。

彼女はとても幼く見えましたが、その内面はどうやらそうでもないようでした。

突然異界に投げ出されたはずの彼女は、しかし、泣きわめいて駄々をこねることはありませんでした。

帰りたいと泣かれたって、魔法使いには彼女を帰してあげることができません。魔法使いにできるのは、彼女が自分で帰れるように教えることだけです。ですから、動揺している様子もない彼女にはっと息をつきました。これでひとまずは安心です。でも、まだまだ油断はできません。今は一時的に思考がまひしているだけかもしれないからです。

でも、それも無用な心配にすぎませんでした。

のちに弟子はこう言いました。だってどうしたってお腹は減るでしょう？

夢でも現実でも同じこと、なら楽しんだほうがいいでしょう。そう言って彼女はにっこりしました。魔法使いが、女は怖いと思った瞬間でもありました。

でもそれは、弟子に言わせれば仕方のないことです。だって男のひとならロマンでお腹がふくれますけど、女の子はそもいきません。夢だけ食べて生きていくわけにはいかないのです。女の子はいつだって、現実的なものなのです。

もっとも、弟子が女の子と呼べる年齢かどうかは危ういところでした(のちに魔法使いはそうと知ったときのことをこう述べています。つまり、まるで黄衣の王にでも魅入られたようなころもちだった、と)。ですが、弟子の持論としては、女の子はいつまでも女の子なのです。八十歳のおばあさんだって、女の子なのです。ですから、彼女自身もちろんな女の子を名乗ることにしていました。

確かに、彼女は女の子と言って相違ない容貌をしていました。

普通の女性よりもずっと小柄で、顔立ちもどこかあどけない彼女は、とても二十歳には見えませんでした。

それに何より、普通の女性よりずっと子どもっぽい言動と行動とが、彼女を更に幼くみせていました。「私は、しあわせな国のしあわせな時代に生まれたから」それが申し訳ないことだと言うように、弟子は笑いました。

しあわせな子どもだったのでしょうか。でもそれが幸福かどうかは分かりません。すくなくとも、悪いことではないと魔法使いは思いました。

私の弟子になりませんか、と魔法使いはたずねました。

ええ、そうしますと彼女は答えました。

そうして異界の娘は魔法使いの弟子になりました。

異界には、魔法というものは無いのといいますが。では何故、異界の人間だけがこんな異能を持っているのでしょうか。何故、彼女はこんなにも早くそれに順応しているのでしょうか。分からないことはたくさんありました。

けれども魔法使いは、考えることをやめました。弟子が笑うからです。彼女が笑っていられるなら、きっとそれでいいのです。大したことではないでしょう。

弟子は笑っています。いつでも何が楽しいのか、にこにこ笑みを絶やしません。

知れば帰れなくなりますよ、と魔法使いは言いました。

それでも構いませんよ、と弟子は答えました。

もう、後戻りはできません。彼女に最早帰る家はありません。それでも弟子は笑っています。ですから、いいかなと魔法使いも思うのです。

誰がそれは間違っていると言ったところで、魔法使いはこの弟子のことがとてもとても気に入っていました。だって、トロルの目で見れば歪んでいるのが正常なのです。どちらがトロルの目かなんてことは、分かったことじゃありません。

一章(三)

ところでクロウは別に、親切心から私を保護したわけではない。使えると思ったから拾った、それだけだ。

私には魔術の素養があった。否。それは正しくない。異世界人にはすべて、魔術の素養がある。そう言うのが、たぶん一番分かりやすい。正しくはないが間違ってもいないから。

それは、この世界の魔術とは一線を画すもの。

それは、この世界の人間には絶対に使うことのできなない魔術。

それは、異世界からの客人のみが行使できる力。

だからクロウは私を拾った。私を異世界の魔術の使い手にするために。ひいては異世界の魔術をその手にするために。別にそれ自体をどうこう言うつもりはない。お互いの利害が一致していればそれでいいのだ。

ただ、ハタチ越えた女としては、知らない人間にほいほい拾われるってのはどうかと思う。思うが、そのときの私にはそれしか選択肢がなかったのだから仕方ない。他に利用できそうなものはなかった。死体なら腐るほど、いや事実腐って転がっていたが。

大体それを言うならハタチ越えて異世界トリップってどうなのよ、というところだ。普通は女子高生とか女子高生とか女子高生が呼ばれるべきなのである。私は別に誰に呼ばれたわけでもないが。それでもその当時は女子大生だったのだから、ぎりぎり範疇内だったと信じたい。女子大生。よし、いける。しかしそれが自分だと思つと途端にいろいろなものがおしおに。でも自分だと思わなければ女子大生。ロマンだ。この単語には女子高生と同じくらい夢が詰まっている。しかし残念ながら自分。

いや、世の中にはロートルチームだったはずがいつの間にか主役を奪取している二十八歳もいるのだから、何ら問題はないはずだ。

私も近々、時間と空間の狭間にて永劫の戦いに身を投じる予定である。実はどちらかというと敵側というか時空震そのものっぽいのは秘密だ。ユゴスは食べないから大丈夫。私の口はそこまで大きくはない。頑張ればできるかも知れないが、別に美味しそうじゃないしなあ。

ともかく異世界に迷い込んだけど別に呼ばれもしていない私は、当然ナンタラの神子だの巫女だのであるはずもなく、王侯貴族との係わり合いもなく、まして甘酸っぱいラブロマンスなど可能性のかけらもなく、だからと言ってどろどろ愛憎劇の渦中に身を置かれることもなく。当然、国家の転覆に関わるような大事件に巻き込まれることもなく、ほどほどに身の丈にあった人生を歩み続けているわけである。

師匠の屋敷を離れてからは勉学に励むでもなく、ふらふらしている。人呼んでフーテンの寅さん。あながち間違ってもいない。ちなみに用例の一である。つまり、そういうことだ。希望はドクターウエストポジである。

そうやってふらふらしていたら、スカウトされた。魔王のお友達に。

それをナンパと言うと思う。

というわけで現在、私は魔王城の食客を生業としている。居候（と書いてパラサイトと読む）とも言う。もっと言うと穀潰しだ。それは生業ではない、という苦情は受け付けない。

なお、魔王のお友達という時点でそれはほどほどの人生ではない、という異論も受け付けないのでよろしく。

「ここに居たのか、エンヤ」

聞きなれた声。それは私とは性別を異にする。

ああ、ここに居たよ。私に何の用かな、対現実逃避用人格私。おねーさんに任せなさい、世界を滅ぼすくらいはお茶の子さいさいだぞっ。自分でやってて気持ち悪くなってきたが、気にしたら負けだ。似合っていないとかきもいとかきもいとかきもいとか、考えたら負けなのである。己に克つということは、かくも困難である。だが、敗けられない。倒れてなどいられない。這ってでも、進まねばならない。命の限り、足掻き続けるしかないのだ。突き進め、前を見る。振り向けどもはや道はない。

それが戦うということだ。本当の戦いの前では、強さすら役には立たない。

「いや違うから。お願いだから現実を見て」

「だが断る」

「断るのを断る」

実にノリのいいやつだ。ちなみにもう分かっていると思うがこの男、魔王である。

一章(四)

レディ・ジネラルというあだ名はセンチが付けた。

センチフォリア・ローラン。可憐な薔薇の名前だが、イメージとはまったく真逆の背ばっかり高い(筋肉はあまりないのでひ弱っぽい。ざまあ)男である。ちなみに職業魔王。謝れ。花に謝れ。

これでムキムキマッチョだったらいつそ王道だったのだが、別にそういうわけでもない。残念だ。

なんで女將軍なのかと聞いたら強そうだからと言っていた。要するに深い意味はないらしい。こいつはこういうやつである。

それではなんだって呼ばれるに任せているかといえ、私は馬鹿が好きなのだ。馬鹿な理由も大好きだ。総じてくだらないことが好きだ。そしてそれ以上に好きなのは、深い意味があると見せかけて実は意味なんてないという行為だった。

だから私は、実はこのあだ名が嫌いではない。なんか中二病っぽくて。聞くだけで黒歴史が蘇りそう。残念ながらもまだに私は黒歴史を大量生産中だったりするのだけれど。もう永遠の中二病でいい。どうやら卒業するつもりもないのだし。

そしてセンチは早急に一文字以内で私がどのように強そうなのか四百字詰め原稿用紙に書き綴るといいと思う。イチモンジだからって隼人なんてのはなしだ。隼人だから神なんてのはもつとなしだぞ。目とか耳とか鼻とか抉っちゃうぞ。

「お前なんか絶対理不尽なこと考えてるだろ」
「うん」

具体的には馬鹿とか軽いとかそんなことを。

即答かよ！ とセンチが力いっぱい叫んでいたが、当然無視す

るに決まっている。別に酷くはない。この男だって同じことをする。私たちはとても仲良しだ。それはもう、悪口の応酬が日常茶飯事なくらいには。

「耳を塞ぐな、地味に傷つくから」
「遠慮しなくていいよ」

謙虚は日本人の美德である。もちろんセンチは無視するに決まっている。今回は私が先手。結局これはただのじゃれ合いでしかない。一步間違えば喉元にぐっさりでも、遊びは遊びだ。まあ、今はそこまで重いものでもない。

ああ、けれど、それにしても。

強そうか。それは一体、どういう意味でなのだろう。物理的か、魔術的か、あるいはもつと別の意味か。魔女、レディ・ジエネラル。思えば遠くへ来たものだ。八年はあまりに長い。

その割に中身はちっとも成長していないが。大体成長する要素が何もないのだから、しょうがないのだ。勇者になって魔王を倒せば良かったのか。そんな主役級の人生など送れるはずもないし、いらぬ。どうせなら脇役になって勇者の補助をしつつ、最終的には忘れ去られることを目的としたい。私は脇役も好きなのだ。

なのにどうして私だったのだろう。

だって私は誰にも選ばれてなんかいない。だから何だってどうだって、良かったのに。でも、二度と手の届かないものを思って泣くのは性に会わない。だってそれは自分を哀れんで泣くのとどう違うと言っただろう。涙は女の武器なのだから、使いどころはきっちり押さえておくべきだ。

遠い日に憧れたヒーローの背中。決められた輪廻をそれでも次に繋げるために足掻いた老人の死に様。鎧の下に隠された血だらけの顔。引きずり出されたタンクから溢れる緑のひかり。……ただひと

つの、恋。それらを全部振り切って、私はここにいる。手放すことは、恐怖ではないのだ。それに、負けることでもない。大丈夫、分かっているから。壊れるものなど何ひとつない。誰が何と言ったって、私だけは知っている。だから、大丈夫だよ。怖くないよ。

分かっている。過去は遠く、未来は見えない。それでも。私は、ここにいる。それは　のためだ。私は　のためだけに存在するのだ。

それは、つまり、そう、この男と漫才をするためだ。

うん、すまない。私が私である限りシリアスな展開などはやってこないんだ。いつだって全力で雰囲気をぶち壊すことに賭けている。それが私のジャスティスだ。私の意識は全力でボケるためだけに存在するのである。

「で結局、なに？」

「何が？」

「だから、何」

「うんだから何」

「いやだから何なの」

一章（五）

王国軍に、天の巫女と呼ばれる人物が現れた。

平たく言ったら、そういうことだった。イシュタルみたいなもんか。生皮の帽子がトラウマです。

「んー、要するにその子をどうにかしろってこと？」

一応、私はセンチんちの居候だ。食客だ。穀潰しだ。ただ飯食らってるからには、それなりに返礼をしなければならぬ。つまり、戦力の提供。これでも私は魔女、魔女とは一騎当千、ただの一人にて戦場の理を捻じ曲げる存在。でもまあ私はあまりそういうことをしない。面倒くさいので。

どちらかというところゴレム軍団を大量生産している。まがい物といえどそれなりには使えるのだ。私の言うことしか聞かないのと、放っておくと敵味方関係なしに殺戮し始めるのがネックだけ。まあ、その辺は仕方がないと割り切っている。元々の性質がそういうものというか、これでも大分マシになっている方だ。ちなみに支配者たる神の写し身なんぞ作った日には怒られることが明白なので、大概は猟犬か食屍鬼あたりで済ませている。一万度の炎なんて召喚したら、私とセンチはともかくとして後の人たちが耐えられないし。

あ、そういえば私がトリップしてきたときに見た死体の山、あれ作ったの八割センチらしいよ。ほら、このひと魔王だから、一応「いや、そうじゃない。つか、実際問題としてお前にも無理だろ。巫女の側には常に国王がいる」

あ、それは無理だ。

異能金剛力、すなわちただの馬鹿力と異界の魔術とを駆使する魔女たる私にもこの世界にただ一人、苦手とする人間がいる。

ロードアイランド国王、レオナルド・エインズワース。もう絶対会いたくない。顔を合わせるどころか米粒程度に見えるだけでも無理。最初に逗留する際、センチにはちやんと言っている。国王が出てくる戦場にだけは行かない、と。それくらい会いたくないのだ。

それには理由があつて、実は私は国王に求愛されておりそれから逃げ回っているのです。とか言ったらラブコメの王道なのだが、そうではない。向こうは私の顔だつて知らないのだ。当然、私に避けられていることすら知らない。王様が出ていくとその戦場には魔女が出てこない、っていうんで魔女除けのまじない扱いされているらしいが。町じゃ絵姿が大人気らしい。持つてると厄除けになるつて。

でもいい年したオッサンが持つてたら嫌だなあ、と思う。何故なら若き国王はそりやもう本気で周囲の景色が霞むくらい、凄まじい美形だからだ。にくい。天は二物を与えんのじゃなかったのか。いやまあ国王が美貌だろうが醜悪だろうが、女にモテようがモテまいが正直どうでもいいのだが、しかし二物どころか三物も四物も持つていやがるところが憎い。ちくしょう。私なんか一も持つてないんだ。

じゃなかった、そうじゃない、脱線した。どうもあの男のことになると、調子が崩れて困る。そうじゃなくて、美形の絵姿を懐に忍ばせたオジサンなんて見たくないという話なのだ。もちろん差別しているとも。そういうものを持つてていいのは女の子だけだ。

だって洒落にならない。女性めいた美貌だったならまだマシだ。どこからどう見ても男だから問題なのだ。

なんというか、あの、陛下になら抱かれてもいい……！ みたいな集団はどうにかならんのか。あれがロードアイランド最強の兵力

って、どうなんだ。男惚れなら男惚れでいいから、頬を染めないでください。照れるな。はにかむな。照れ隠しに攻撃してくるな。私の夢を返せ。おかげさまでこっちは国王の名を聞くだけでもげっそのりぐったりだ。

まあ、どうせ会い見えることはないんだから国王自体はこの際どうでもいいのだけれど。とりあえず、会いたくない人間ナンバーワンなのだ。私はそれさえ分かってももらえればいいし、別にセンチ以外の誰が分かってくれなくてもどうでもいい。居候の身だから家主、すなわちセンチの願いくらいは聞くけど、後の有象無象が何を言っただってこちらには関係ないのだ。

あの集団については……いや、もう何も言うまい。

えーと、で、天の巫女とやらは何だったの？

タイラントの恋

その恋は、ありふれた悲劇に終わった。

ごく普通の二人が、ごく普通に出会い、ごく普通に恋をして、と言ったら嘘になる。何故ならば男はこの国の王子であり、女はいち平民に過ぎなかったから。

結末は当然、アンハッピーエンド。二人は引き裂かれ、るまでもなく、女は死に、男は国王の座を継いだ。ごくごくありふれた、悲恋の物語。一山いくらの安っぽいロマンス。殺したのは魔女、なんて、あまりに出来すぎたストーリー。たとえそれが彼の、今も引きずる過去だとしても。

男の名は、レオナルド・エインズワース。
現在のロードアイランド国王である。

即位して六年、今年二十四になる彼には、正妃というものがいない。

本来であれば、それは異常。だのに問題になっていない理由は、誰もが知っていた。このロードアイランドに暮らす者なら、子供でさえ知っている。むしろ、知らぬ者はわずかなよそ者、流れ者のみ。二十四年前、生まれた赤子はひとつの予言を受けた。彼が迎えるのは異界の花嫁。誰もがその予言を信じて、正妃の座は空席のまま。レオナルドには都合が良かった。これまでは。

ロードアイランドには魔女がいる。

異界の魔術をあやつる異端にして異能の魔女。ただの一人にて戦場の流れを変えてしまえる、そういうモノであるところの。魔王軍につき、気まぐれにその力を貸し与える。魔王みずからレディ・ジエネラルと呼ぶ存在。かの魔女を倒さねば、王国軍の勝利はない。

けれども異界の法則は、同じく異界の法則を持ってしてしか斃せない。異界より現れた魔女を打ち倒せるのは、異界の人間のみ。自らの手で敵を取ることさえ許されない。諦観は常にやさしいものだ。ゆえに。王国は、天の巫女の召喚を決定する。異界より来る少女。巫女といえは聞こえはいいが、それは結局人柱と同じことだ。

レオナールは思い悩み、そして

「……子供、ですね」

「な？ 失敬な、あたしは十八歳だ！」

ルイと出会った。

最初の印象は、子供。年のころは十三か四か、そのくらいだと思っただ。それはすぐに、彼女自身の言葉によって否定されたのだけだ。

とても十八には思えない、幼い顔立ち。それに似合わぬ、物怖じしない性格。ルイ・シオタニ。異界より召喚された、天の巫女。くるくるとよく表情の変わる、屈託のない少女。似ていると思った。その一方でまったく似ていないとも思った。かつて愛したのは、海をその名に持つ女。

そして、今日の前にいるのは涙という意味を持つ名前の少女。もう、いいのかもしれないと思った。

レオナールが迎えるべきは、異界の花嫁。ならば天の巫女は適任である。誰もがそう思い、そして事実、前王妃を筆頭とした一部の人間は婚姻の準備さえ進めていた。ルイ自身、レオナールのことは憎からず思っているようなのだ。満更でもないように笑う少女は、確かに愛らしかった。

天の巫女。あつという間にいくつもの武勲を立て、ほんの一月たらずの内に民の信頼と尊敬、親愛と憧憬とを得た少女。確かにこれ

ほど王妃に相応しい人間はいないに違いない。きつと歴史に残る、素晴らしい王妃になるだろう。

レオナールだけが、その熱狂の中に立ち入れないままにいる。

この世に、過去に、もしもなどというものはない。けれど考えずにはいられない。もし、彼女よりも先に出会っていたら 否。何度繰り返したところで、それは無意味な問いでしかない。先に出会ったところで。

可愛いと思う。愛しいと思う。けれどもルイは、彼女にはなり得ない。似ているものは結局、非なるものでしかないのだ。

「私は、ロリコンではないのですが」

「あのなあ、本人が十八だっつってんだから信じてやれって」

それでも己はロードアイランド国王。冗談めかしてぼかした言い方はできても、流れを拒むことはできない。それに、彼女でないなら誰でも同じことだ。ルイを泣かせるかもしれない、とふと思った。それでも、恋情なんて自分勝手なものではない。

婚姻は、魔女が斃れた後に。恐らくそういうことになると、分かっている。巫女の力を完全に王家に取り込むためにも、それは必須。けれど。

ルイが戦場に立って一月。

魔女はいまだ、天の巫女の前には現れていなかった。

かナマケモノで、何だか野うさぎみたいな耳をしていたけれど、概ね力エルに似ていた。もふもふだ。可愛い。

だから私はもう何も考えずに、それを「つぁーとーが」と呼んだ。腕が六本ある毛の生えた藝、ならばもう少しだけ別の名前で呼んだけれど。

背後でクロウが快哉を叫んだけれど、どうでもいい。こんなに可愛いのに実は不定形だなんて信じられない。私は早速抱きついて、力いっぱいにもふもふを堪能した。可愛い。すごく可愛い。実はこんな見た目して本質は不定形だから獣くさくないのが残念だけど、もっふもふだから許す。もっふもふーもっふもふー！

その日私は、たぶんくるった。

クロウはもういないけど、あの子は今でも私の側にいる。かわいかわい、いとしい私のつぁーとーが。この子は所詮似姿でしかないけれど、でもそれでも神の似姿だ。いつも私が作る、量産型ゴレムとは全然違う。これは私の一番最初の作品で、最高傑作。ほとんどオリジナルと変わらない。

だっていうのに、なんでこんなに可愛いんだろう。自画自賛。いや、むしろオリジナルが可愛いからこの子も可愛いのか。これはしようがない。狂ったってしょうがない。理性がぶつちぎれて本能だけになっても肯ける。すさまじいまでの威力だ。破壊力抜群だ。これはもう抱きついてもふもふするしかない。

もふもふしていると周囲の人間にどん引かれるのだが。

お前だけだ、とセンチは言った。そんなものを愛玩するのはお前だけだ、と。失礼な。そうでもないぞ。どうもこの世界の人間（魔族だけ）の美的センスはよく分からない。だってこんなにもっ

ふもふなのに。

よく見るとなかなかユーモラスな顔をしているし、そのうえ前足が人間の腕っぽくなってるから、ぎゅーってしてもらえるのに。しかも喋れる。片言だけど。片言だからこそ、それがまた可愛らしさを演出している。こんなパーフェクトな生き物は、なかなかいないさすがは私。すてき。すばらしい。びゅーりほーわんだほー。とは言ってもそれはやはりオリジナルが素晴らしいから万分の一であるところのこの子もまた素晴らしいのであって、私の功績ではないのだ。

そう。この子は私が想像し創造した私の子供。まがい物の神さま。ぎゅっと抱きしめると、ぎゅっと抱きついてくる。私だけがこの子の王様で、この子の世界。私のいない世界ならいらなんて、我が子に言われて嬉しくない親がどこにいる。

なんて健気で、なんていじらしいんだろう。そんな存在を愛さずにいられるだろうか、いやない。反語。

ふんだ、センチになんか一生もふもふさせてなどやらんからな。せいぜい羨ましがればいいわ。悔しかったら自分も呼び出して。と言ったら、真面目な顔で遠慮された。むかついたので寝ている間に額に「肉」と落書きしておいたのも良い思い出だ。

「あれやつはお前だったのか！」

「ふん、もふもふしたいくせに認めないお前が悪い」

「いやしたくないから！」

もっふもふー。……現実逃避と、言うなかれ。癒されたいのだ、私は。ほんとに、勘弁してくれ。なんでこう、どいつもこいつも面倒ごとに首を突っ込みたがるんだ。見ないふりして投げとけばいいじゃないか。

一章（七）

天の巫女。

異世界から召喚された少女。

私を倒しにやってくる。

彼女について、私が知っていることはそれだけだ。

魔女を打倒せんがため召喚された異世界の少女。名目上は王家の客人、けれど戦場を駆け身一つで数々の武勲を立てているのだそう。その理由は、放つてはおけないから。いや聞いたわけじゃないから知らないが、多分そうなんだろう。それが王道ってやつなんだから。強制されてるわけじゃなさそうだし。

女神様だか天女様だか知らないけど、なんか大人気らしいよ。あんな幼げな見た目でナントカカントカ、身分がどうなのでエトセトラエトセトラ。可愛くて強くていい子で、ですか。ああまったく。王道すぎて嫌になる。なんでこうも違うかね。別に主人公になりたいわけじゃないけどさ。いや、なりたかった、のか。昔の話だ。

それでも、私にだって譲れないものくらいある。まだ見ぬ天の巫女。打倒されてはやれない。この命、くれてやる相手ならとうから決まっているが。でもそれは、まだ先だ。生憎私はミツバチではないので、覚悟遺伝子とかは持ってないのだ。というかできるなら一生覚悟完了したくない。だってしたら死んじゃうじゃないか。あたら若い身空で死にたくはない。いや、あんまり若くないけど。若さが足りない。主に精神的に。若さって何だっけ。振り向かないことだっけ。

でもそれは、それも含めて、大した問題じゃない。問題は、センチのあの言葉だ。

(巫女の側には常に　　がいる)

よし、逃げよう。しばらく百年ぐらい引きこもろう。いくら何でも人間ごときに負けるセンチじゃないはず。負けたら指差して笑ってやる。とりあえず逃げよう。

だって無理だ。なんなのあの美形。美形とか死ねばいいんじゃないの。私は美形が嫌いだ。大嫌いだ。それがあの男というならなおさら。

あ、可愛い女の子は大好きです。目の保養。ちっちゃい子は男女問わず好きです。大好きです。美形のおじさまだって大好きです。もちろん差別だとも。私は若い男が嫌いだ。大嫌いだ。それでもつて、若い男の美形が一番嫌いなのだ。男は四十過ぎてからだろ常識的に考えて。

というわけで、私はひきこもりにジョブチェンジした。

元々似たようなものだ、というのは言うてはいけない。

「というわけで私はしばらく百年ぐらい戦わないから。一人で頑張つて」

「いや百年つてお前死ぬだろ」

その通りだ。

いくら人間離れしていても所詮は魔女、どれだけ人間の範疇を飛び出たところで人間でしかない。当然 آپトーシスを防ぐことはできない。というより。

さすがにこれ以上、人間を辞めたくはない。第一他人の体乗っ取るとか脳髓だけとか、絵面が美しくない。私は人間なんだから、人間として死ぬべきだ。ああでも、もっふもふになれるんだったらちよっと考えてしまつかもしれない。でもなあ。それは結局、私という個は死んでるよな。結果的にはあまり変わらん。

センチが呆れたように溜息をつく。それでも、この男は何も聞かない。

聞いて欲しいのか、とセンチは言った。さあ、どちらだろう。

無理やりにも聞きだして欲しいのかもしれないし、絶対に触れられたくないのかもしれない。その両方かもしれない。そんなのは結局、同じことだ。

そんなのどうだっていいじゃないか。今が楽しければ。闘争本能はないけど逃走本能なら持っている。三十六計逃げるに如かず。問題は前に逃げるか後ろに逃げるか、だ。もう間をとって敵に向かつて全力後退、立ち塞がるもの皆薙ぎ倒して逃走でいいんじゃないの。

何だかにやにやしているセンチが、ちよっぴりでなく恨めしいので、予備動作なしに繰り出したハイキックは当然ながら空を切る。見事なまでの間一髪、いつそ優雅なほどふわりと舞う黒髪、こうまで見せ付けられると腹立たしいを通り越して呆れるばかりだ。

何だろうな、魔族ってさ。見た目そんなに人間と変わらないけど別に人間なんか食べたりしない、お茶してるところなんか見たらきつと力が抜けると思うんだが。あんまり変わらなさすぎて。

ただ圧倒的な力と、長大な寿命。違うのは多分それくらい。でもそれって、人間には脅威なのか。よく分からないのは、実は元からだ。

一章（八）

見上げれば、雲ひとつない晴天。絶好の行楽日和。

見渡せば、周囲は森。緑を揺らせて、風が渡っていく。

素晴らしいロケーションだ。ささやかなピクニックにはもってこい。

人はそれを現実逃避と呼ぶ。

足をぷらんぷらんさせると、小さい頃に帰ったような気分だ。子供って高いところ好きだよな。まあ、ちょっと高すぎる気がしないでもないけれど。

私がどこにいるかと言ったら、木の上だ。

木の上。

樹上。

オンザツリー。

ちなみに広葉樹じゃなくて針葉樹。

気分は森のトルルだ。何しろ眼下に広がるのは爽やかさとは無縁の、どちらかというと不気味な森。風が吹くと言ったって、さやさやなんて可愛いものじゃない。ざわざわでも可愛いくらい。かなり暗黒。はっきり言って絶対何か出る。魔物がそこに潜んでると言われたら信じる。というか実際潜んでいるわけだが。

それ自体は慣れ親しんだものである。多くの魔族にとってそうであるように、私にとってもこの森は庭でしかない。

森に名前はない。人間が付けた名前はあるけれど（確か黒い森と

かそんなだったはず)、魔族は森は森であると考え。だから、名前がない。そもそも魔族には地名という概念がないらしい。

いや、概念がないのとは違うか。地名を付ける、という考え自体がないのか。人間と違ってそもそも陣地というものがないから陣取り合戦をする必要もなく、よって名称で区別する必要もないのだろう。せいぜい東西南北がある程度だ。ここはロードアイランドの北の果てで、それ以上でも以下でもないらしい。地図上は王国に位置しているんだろう。人間の住める場所ではないというだけで。

さて、木の上。別に下から一生懸命登ってきたわけではない。望めばどこにだって、好きな場所にいけるのだから。

一本突出して高い(樹齢も相当に高そうな)木の、でも天辺だと目立つのでそれよりちよつと下。頑丈そうな枝に腰掛けて、足を揺らす。スカートはいてたら大変じゃね? という思考が掠めたが、それが自分じゃあ何も楽しくないので却下。

眼下に広がるのは森と川と丘と、その向こうの廃村。それと。

近くまで天の巫女が来ている、と言ったのはセンチではなかった。ああ、そうだろうな。だから、聞かせたのか。
心底参ったなあ、と思う。

やっぱりね、完璧に避けきるためにはまず敵を知らなければならぬと思うんだよね。顔も見たくない相手が漏れなく側に控えてるらしいけど、確認だけしたらすぐ逃げればいいんだし。

と、思っていた時期が私にもありました。

ええと。あれかな。おねーちゃん、あんまり綺麗さっぱり忘れてたから、怒って出てきたのかな……そっかーそうだよ、道理で探しても見つからないわけだよ！ だって時間が違うんだもんね！ はっはーとか思わず大声上げそうになって、でも留まった自分よくやった。え、ちょ、何やってんの。

今回ののは、別に戦いに来たわけじゃないらしい。敵情視察ってか。少人数だし、いや、少数精鋭ってことなんだろうけど。その中心に、小柄な少女の姿がある。少女と呼んでいいだろう。こちらの人間からすれば。

私は、彼女を知っている。

彼女の名前は塩谷泪。年は十八、性別オンナノコ、ジュケンセイでひーひーゆってた。うん、正しい。この上なく正しい。救世主として呼ばれるのは、女子高生であるべきだ。

それが妹でさえなければな。

えーちよつと、こういう事態は想定していなかったなあ。勘弁してほしいなあ。脳裏でめーちゃんが笑う。そりやお前は楽しかろうよ。伸ばした手。つかんだと思ったその瞬間、うしなつた指先。あれ、でもおかしいな。それっておかしくないか。

天の巫女は魔女、すなわち私を打倒せんがために召喚された。なんで一緒に飛ばされた私が、呼ばれた理由になってるんだ。

大体八年のブランクは何なんだ。えつと、夢？んなわけあるか。じゃあ泪も実は八年前からこっちにいるんだけど、協力するようになったのは最近とか。いや、違う。センチは私に嘘をつかない。だって何の得もないから。でも、じゃあ、なんで？

ああでも。脳裏で暗黒の女が嗤う。やれやれと肩をすくめて、私も小さく笑った。

どのみち気づかれないなら、妹だろうが恋人だろうが同じ、か。

異界の少女

手を伸ばした、ような気がしたけれど。

目が覚めたとき、塩谷泪はひとりだった。その場には四人の男がいたが、そもそも数など問題にならない。

なに、これ。それが、泪がその世界で発した一番最初の言葉だった。

夢にしても、それはとびきりの悪夢だった。ただでさえ奇妙な喪失感に、目覚めは最悪。あたしつてば意外と服飾に適正あるんじゃない、と凍りついた頭で泪が考えたのも仕方のないことだと言えよう。

その場には四人の男がいたが、誰一人として普通の格好をした人間はいなかった。例えるなら、中世ヨーロッパ。それも身分の高そうな、豪華な衣装ばかり。中でも目を引いたのは、あからさまにファンタジックな白いローブだった。彼こそが己をこの世界に召喚した魔術師だと、この時の泪はまだ知らない。否。これが現実だなどとは、思ってもみなかった。

巫女、と呼びかけられて、それが自分のことだとは思わなかった。体を起こして始めて知る。一面大理石のように白い部屋。その中心、やはり白い石でできた台座に泪は横たわっていた。まるでファンタジーのワンシーン。でも、その場にいるのが自分では笑えなかった。

それでも、ここごことは泪は言わなかった。理性がそれを拒否したから。

夢だと思っ以外に、何ができただろう。目を開ける前は確かに、自分の部屋にいたのだから。

何よりも信じられなかったのは、男たちが持つ色彩だ。

銀髪。青い目。緑の目。それだけなら、外人さんで済んだ。鮮やかな濃紅の髪。紫の瞳。淡いスカイブルーの髪。とてもブリーチやカラーコンタクトではあり得ない、それはあまりに信じがたい自然さだった。間違いないく自前だ。

何これともう一度、今度は声には出さずに呟いて、涙は立ち尽くした。夢なら早く覚めて。

その後のことは、実はあまりよく覚えていない。ただ、強い光を宿したアイスブルーの瞳だけを覚えている。胸が詰まるような切なさでもって、涙はその視線を受け止めた。

何故か。

もう、帰れないと思った。

そうして実際に、帰るすべはなかった。

他ならぬ涙を召喚した張本人、王宮付き魔術師の長と名乗った男が、土下座せんばかりの腰の低さで、けれど、それでも言い切った。一方通行なのだ。喚ぶことはできても、帰すことはできないと。そんな魔術は存在しないのだと。

「ご、ごめんなさい。でも、」

じわりと滲む景色を認めたくない。謝ってほしくなど、なかった。まして言い訳など。

来ることができるなら、帰ることもできるはずだと思った。だから、これが夢ではなく現実だと分かってても涙は慌てなかった。どうせ帰れるなら、そんなに急ぐこともない。ちゃちゃっと魔女を倒して、ゆっくり観光して、それから帰ろう。そう思った涙は確かに危

機感も覚悟もなかったのだろう。

帰れない。

分かった瞬間、心底から帰りたいと思った。父と母に会いたかった。愛犬を抱きしめたかった。自分のベッドに潜り込みたかった。唇を噛み締めていなければ、ヒステリックに泣き叫んでしまっただった。帰してよ。帰して。

そうしなかったのはただ、矜持が涙を支えていたからだ。

「あ、あの」

応えは返せなかったけれど、多分それくらいは許されるはずだ。唇を引き結んで歯を食いしばる。そうしていなければ、とても耐えられない。

怯んだ様子で、しかし魔術師は言った。

魔女ならば、涙を元の世界に帰せるかもしれない。

魔女。このロードアイランドを脅かす存在。魔王に力を貸し与え、残虐非道の殺戮を繰り返す。異世界の人間。とても、繋がらない。思わずきよとんとした涙に、魔術師は続ける。

「魔女は、時間と空間を操るから」

それがどういうことなのか、知る者はいない。ただ、魔女の前にそれらの概念は無意味でしかないのだという。だから、あるいは、と。

おかしかった。

可笑しかった。

倒すべき相手に頼らなければならぬ己の現状が。

それでも。

彼らを責める気にはどうしてもなれなかった。その理由を求めることはあまりに簡単で、泪はシャツの胸元を握り締める。国王だと、名乗りを挙げた銀の髪のひとつ。氷蒼色の残像が脳裏にこびり付いて、どうしても離れない。

始まりはいつだって、些細なことなのだ。

一章（九）

前回までのあらずじ。だからだとしてたらなんか妹が私を倒しにや
つて来たのでおねーちゃんはずあーとーがのつくくんをもふもふす
るだけでは耐え切れないほどのショックを受けました。以上。

あながち間違っではない。

そこで私は思った。そうだ里帰りをしよう。

人間、現実逃避のパターンというのは案外決まっているものだ。

私にとって、その最上級が本を読むことだった。いや、別に漫画で
もいいけれど。

しかしながら、こちらの世界には大したエンターテイメントがな
い。本がないとは言わないが。

私が求めているのはB級エンタなのに、エログロスプラッタは規
制されていますってどうということ。文化レベルが中世相当っぽい
で仕方がないのか。だから他人の不幸は蜜の味みたいなご近所関係に
なるんだ。

仕方がないので家に帰る。この場合の家とは実家ではなく、借り
ている安アパートの一室だ。最近近所のコンビニが潰れた田舎だが、
私の城である。所在地、日本。

呪文が長くて覚えられない。カンペ代わりのメモ帳を掲げもって、
つつかえつつかえ読み上げる。いろいろ売りなら暗唱できるが、こ
れはちよつと人間の言葉じゃないので無理だ。早口言葉よりずっと
難度が高い。もっとも求められているのは規定の文章を読み上げた
という事実だけなので、さして問題はない。

さあ帰ろうと思ったら、何でか幼女がついて来た。邪魔しないな
らね、と前置きしてから拉致した。

「暇なの」

そうか。

「ねえ。暇だわ」

私は暇じゃない。

「ねえ　　これの何が楽しいのか、わたしには分かりかねるわ」

ちよ、おま何してくれちゃってんの！

愛すべきハードカバーの表紙を掴んでぶらぶらさせているめーちゃんから、慌てて本を奪取。あああ危ない危ない、あのまま落とされたら大惨事だ！　ほう、と息を吐く私を、めーちゃんがつまらなさそうに見ている。めーちゃんは本を読まない。本なんて所詮は記録媒体でしかないでしょう、と凄まじい暴言を吐きくさった。私は心が広いので許すが。

はあ。もうひとつ、今度は先ほどとは違う意味で溜息を吐き出して、私は仕方なく少女を視界に入れた。

少女。そう、少女だ。外見だけなら十に満たない、幼い子供。なのに深いスリットに背中が大きく開いた大人びたデザインのもの、すっとしたドレスがともアンバランス。ひらひらふりふり、なんてどこにも見当たらない。

せっかく幼女なんだからゴシッククロリータとか着ればいいものを、しかしめーちゃんは着せようとするの嫌がるのだ。ちなみに甘ロリは断念した。黒髪はまだしも、人工ではあり得ない真紅の目にペールカラーは似合わない。

大きな目は目じりが切れ上がったアーモンド形で、小さな鼻はつんと上を向いている。これまた小さな唇は勿体ないことに大抵への字に引き結ばれているか、そうでなければ妖しく弧を描いている。気の強そうなきつい顔立ちをしていて、事実気が強い。

体型について特筆すべきことはない。むしろあると言っなら言ってみる、である。要するにつるぺた。幼女だから当然だ。それなのに表情や仕草のひとつひとは暴力的なほど妖艶。色気垂れ流し。幼女だけど。めーちゃんのせいで道を踏み外したり破滅したりする人間を観察するのは結構愉快。

もつとも、見た目通りの年齢というわけではない。めーちゃんは最初からこの姿で、いつまで経ってもこのままだ。つぁーとーがと同じ、似姿。つーくんは私の最高傑作だけれど、めーちゃんは最高の失敗作だ。作成者の意図から大きく外れた作品は、何にせよ失敗である。

上目遣いに見上げてくる、その仕草なんてどこで覚えてきたのかしらと思う。おかーさんはそんな子に育てた覚えはありませんよ。と言ったらセンチに笑われた。お前に色気がないのは分かっている！……後で埋めよう。

「ねえ、エンヤ。あそんで？」

うっん、エロい。おねーちゃんは是非ともその辺のテクニクを教えてくださいたいです。使い道はないが。

グロスも塗ってないのに艶々した薄桃色の唇が、催促する。ああ、分かっているって。うちのオヒメサマは我がままでいらっしやるのだ。私がつい甘やかすから。しかしながら、可愛いは正義なのである。無碍になどできない。私は現実逃避を諦めた。

さらば、^と新刊よ。

一章(十)

幼女拉致事件は未遂に終わった。というかそもそも、自分が保護者である時点でそれは拉致ではない。保護者、のようなものだろう。めーちゃんは見た目は子供、頭脳は大人！ なのなので、一人でうるうるするのは控えているのだ。あちらでもこちらでも同じだけれど、見た目が子供の時点でどうしようもなく行動が制限される。だから適当な大人であるところの私にくつついて回るのである。

と言つとめーちゃんに睨まれる。上目遣いに。私に色目使つて楽しいか。ちくしょう、私ができないからって見せつけて楽しいか。いや、別にする相手もないししたくもないけど。

ほんの二時間程度しかいらなかった我が家に別れを告げると、再びたどたどしく呪文を唱えてロードアイランドに戻る。こうして積みゲーならぬ積み本が増えていくのである。確か昔読んだ本には「積ん読のすすめ」とかというのが載っていた。これもまた読書の一形態なのだと割り切る……れない。活字が読みたい。でもめーちゃんは可愛い。うーん。

未練だぜ、とか言ってみるけど別に腹に大穴は開いてない。

「それで、どんな遊びをご所望ですか、お姫さま？」

にい、と唇の端を釣り上げて、おそろしく外見にそぐわない笑い方をする。さあ、どうしようかしら。えええ、何も考えてなかったよこの子。この後に続く言葉なら、もう予想がついている。

「考えるのはあなたの役目、ですか」

「考えるのはあなたの役目、よ」

さいですか。

と言つて、すぐに思いつくはずもない。というか私は元々インドア派の学者肌なので（どうせ自称だろうとか言つてはいけません）、若い女性の言う遊びなんて思いつかないのが本当だ。

これが日本で相手が友達ならカラオケか買い物に行くけれど、ここはロードアイランドで相手はめーちゃんだ。

めーちゃんはこんな見た目をしてはいるけれど、これで一応人外なので。見た目通りの女の子ではないのだ。

「あら、無駄なことは大好きよ？」

これで一応人外なので、思考を読むくらいは朝飯前である。もれなくサトラレの気分が味わえます。嬉しくない。

そしてこれで一応人外なので、人間の娯楽なんてものはすべて追体験の手段でしかないのだ。カラオケも買い物も遊園地も、めーちゃんは好きだという。ただ、楽しみ方が人間とは違うだけのことだからつまり、

「めーちゃんにとっては全部が全部、無駄なことではしかないんだね」

分かつちやいたけれども。

あなたつて本当に酷いひとね、とめーちゃんが笑つた。知つてるよ、と私も返した。

今日も今日とて大活躍の獵犬くんたち。もとい自慢のゴーレム軍団。いまいち名状しがたい悪臭にも慣れた。やれやれ。背後に迫つていた男の顔面に拳をめり込ませつつ、私は肩を竦める。いい加減

王国も諦めたらいいのに、勝るのは数と知恵だけなんだから。もつとも、それだけあれば十分勝機はある。何しろこちらは各個の能力だけだ。

とりあえず兵隊さんの頭蓋を砕いて、淡々と息の根を止めていく。砕く。砕く。砕く。……飽きた。

飽きたけど、しょうがない。私にとってはほんの二時間だけど、めーちゃんにとっては二時間「も」なのだ。私もたいがい、めーちゃんに甘い。

しかし飽きた。砕いて砕いて砕いて砕く。この人たちもなあ、可哀そうに志願したばかりに。でも、基本的にぺんぺん草も残さなのが魔族のケンカだ。

戦争ではない。

砕く砕く砕く。なんかこうして並列すると頭蓋を砕くことに執着している猟奇殺人犯のようだがそんなことはない。もっと単純に、ルーチンワークは楽であるというだけの話だ。下手にオリジナリテイなんか取り入れると面倒くさくって。さくさく砕いて次に行く。化け物呼ばわりももう慣れた。

という、遊びをした。

所詮何もかも遊びでしかない。めーちゃんにとっては。それはもう、仕方のないことだ。無関心とどちらがマシか、というくらいだ。それにしても我が家のお姫さまと来たら、今日は一段と気難しい。余程待たされたのが気に食わなかったらしい。自分でいいって言ったくせに。

結局どんな遊びもめーちゃんのお気に召すことはなく、持ち出したこれは最終手段である。その甲斐あって、何とか機嫌を直していただけたようだ。やれやれ。

魔女の契約

その少女は、まるで魔法使いと入れ替わるかのように屋敷へとやってきました。

屋敷といつたって、広いばかりで何も無いのです。あるのは怪しげな実験機材と本ばかりです。おんぼろで、村のひとたちには「化け物屋敷」とひそかに呼ばれているのを知っています。それになにより、広くたって使わないのですから、そこら中くもの巢だらけでした。

魔法使いがいなくなったのは、うらかな春の日のことでした。

どこへ行ったのかは誰も知りません。知っているはずがありませんものね、あの世のことなんて。それも地獄のことなんて、誰も知りたいたとは思いません。

資格をもたない魔法使いなんて、地獄に落ちるに決まっています。人びとはくちぐちにうわさし合いました。化け物屋敷の住人は、あまり積極的には村に関わろうとしませんでした。ですから、ほんとうは村人たちはあの丘の上の化け物屋敷について、とても興味をもっていたのです。

でも、それさえも弟子にとってはどうでもいいことでした。

魔法使いがいなくなって、弟子は屋敷の外には出なくなりました。以前は月に一度か二度、買い物をするために降りてきていたのですが、それもぱったりなくなりました。村人たちはますます口さがないものからです。みんな弟子のほうもいなくなったのだらうと思っただのです。

じっさいには、それは間違いでした。

なぜって、ほんとうのところは、魔法使いがいなくなった今、弟子が村に降りる必要もなくなっていたのですから。

もともと、彼女はのぞめばどこにでも、好きなところに行けるのです。そういう魔法を知っているのです。でも、それはあまり使わないようにと言われていたのです。誰にでも使える魔法ではないからです。それこそは、異界の人間だけが持つ異能でした。

でも、魔法使いはもういません。魔法使いとの約束を忘れたわけではありません。ですが、弟子は魔法使いが知らなかったことをもつとたくさん知っていました。なにしろ、自分のことでしたから。たくさん使っても、あまり使わなくても、同じことなのです。もうとつくに、帰り道はないのです。でも、魔法使いと約束したので使わないでいたのです。

でも、今ではもう、帰りたい場所もありません。

屋敷に以前のような活気が戻ったのは、それからしばらくのことでした（化け物屋敷に活気というのも、おかしな話です）。

ただひとつ違うのは、住んでいる人間が変わったことでした。

魔法使いはヒゲをたっぷりとたくわえた男のひとでしたが、今いるのは十にも満たないような少女です。でも、弟子にとっては同じことなのでしょう。

村人たちは知りません。屋敷にこもりきりになって、弟子が何を探していたか。何を見つけたのか。少女がどこから来たのかも、誰も知らないのです。

少女は名前をメーテルといました。弟子の故郷の言葉で、みちびく者をあらわすのだそうです。少女にはもともと名前がなく、弟子が名づけたのだといいます。それ以上のことは、誰も知りません。知っているのは弟子だけです。

また、弟子は村に降りてくるようになりました。今度は魔法使いではなくて、少女が一緒です。どうやら、見ているかぎりでは、少

女にねだられて来ているようでした。

アイルズベリイはロードアイランドの北の果てです。たいして面白いことも、娯楽めいた娯楽もありません。ですから弟子と少女はともおもしろいことで、ひよっとしたら村いちばんの娯楽でした。でも、そのうちそれも、ただの日常になりました。

昔むかし、ぐれーと・おーると・わんという悪い神さまがいました。あんまり悪いことをしたのでえるだー・ごっどという良い神さまがあらわれて、ぐれーと・おーると・わんは倒されてしまいました。というのはおとぎ話でしかないのですが、でも、信じているひとは少なくはないのです。

ぐれーと・おーると・わんがいつか復活してふたたび世界を支配するのだと、信じるものはあるのです。

そう信じている人が丘の上にもいるのだと、村人たちは誰も知りませんでした。それはさいわいだったのでしょうか。不幸だったのでしょうか。今となっては、分かりません。

二章（一）

誰だ、実は私は国王に求愛されておりそれから逃げ回っているのです。とか言ったらラブロマの王道なのだが云々とか不吉なことを言ったやつは。私だ。いや違うんだ、言い訳をさせてくれないか。だってまさかこんなことになるなんて思ってもみなかった。まさかあれが伏線だとは……ああ、うん。

どうやら私は、自分で思っていた以上にテンパっているらしい。

思ったより顔が割れていないことに気づいたのは、センチの手伝いを始めてすぐのことだ。町を歩いていても、別に気づかれたりしないんだよね。ただのガイジン扱いだ。期待してたわけじゃないんだけど、何かこう、もうちょっと、あるだろう。

でもしょうがないかあ、と思う。よく考えたら単純に伝言ゲームが成功していなかった。周囲全部殲滅して歩いてたら、そりゃ顔は割れんな。もうちょっとこう、お尋ね者気分とか味わいたかったのだけれど。変装とか変装とか変装とか。

とか思っていたこともありました。

今じゃ気が緩んでいたとしか思えない。

緩むも何も、元からゆるゆるだったのは本当の話。

何があつたかつていうとまあ、なんかね、エンヤさんたら町歩いてたら国王に求愛されたいよ。うわあ、すごいね。ああ自分のことだって認めたくない。何これ悪夢？ほんとに勘弁してください。何あの美形。敵？敵なの？私の敵なの？ちくしょう貴様どこまで私を凹ませたら気が済むんだ。ああそうさ、八つ当たりも甚だしいさ。

参ったなあ。結構、キている。自分が意外と引き摺るタイプなの

は知っていたけど。テンション下がるなあ。だだ下がりだなあ。そりゃ溜息も出るさ。恋愛って何よ。おいしいの？ なんかもう口から砂糖どころかビーム吐くよビーム。

それでも肯いてしまったのは 下心がなかった、とは言わない。言えない。

あれが私からクロウを奪った男。けれどそのことについて、是非を言う気はない。だってあれはクロウの決めたことで、私が口を出せることじゃない。だから何も言わないけど、悔しいと思うくらいいいじゃない。

逃げ回ったら王道だ。私は逃げ出さなかった。それが間違っているとは、知っていた。

いやだって、あんまり面白そうだったもんで、つい。出来心です。今は後悔している。

(一目で恋に落ちてしまいました。私と来てはくださいますか？)

(ええ、いいですよ)

ええ、いいですよ。その茶番、付き合ってさしあげましょう。

私は魔女で、あの男にとって魔女は恋人の仇だ。レディ・シエネラルそれが一目惚れだって？ もう、面白すぎて。今なら笑い死にできそう。

射抜くようなアイスブル！。あれは、とても一目惚れの相手に向けるような強さじゃなかった。いいね。最高だ。うん、私、そーいうの好きよ。

と思ったのが、間違いだっただ。

その結果がこれだよ！

冗談じゃない。何がテンションだだ下がりって、これだ。このドレス。典型的日本人な醤油顔かつがちり骨太な私にドレスが似合うかっていうんだ。初対面の人に何かスポーツしてますかって聞か

れるんだぞ。肩幅広くて悪かったな。

細くて薄い、いかにもイマドキの若者然としたスタイルに憧れを持ったところで、骨格から違うんだからどうにもならない。悪かったな、太腿のそれ全部筋肉なんだよ。太いんだよ。ちくしょう。

とか思っていたのだが、いや、さすがにプロは違うね。何とか見れるくらいにはなっている。一応。プロすごい。未恐ろしい。

なんていうかピンクとかじゃなくて良かった。日本人はピンク似合わないらしいけど。あれ、それは口紅の話だっけ。

しかしあれだな、お貴族様ってのは何でこう精緻な模様とか細工とかを好むのかね。センチのところか何とというか質実剛健！ だったので、ここはちょっと私には甘すぎる。いや、私も何だかんだ言っただけの子なので嫌いじゃないですがお姫さまベッドとか。嫌いじゃないが、どうにも似合わないのだ。残念。

めーちゃんなら似合うんだが。それか、……天の巫女なんて呼ばれてるらしい、妹を思う。うん。あの子なら似合うだろう。姉の欲目とかではなく。

しかしそうか。ここには妹もいるんだなあ。泪は私を見て何と云うだろう。そんなの今更なのに、少しだけ怖いのもかもしれないと思っただ。馬鹿な話だ。

二章（二）

そもそもどうしてこうなったかというところ。

いやだって。まさか国王陛下御自らこんなところに来るなんて、思わないじゃないか。

こんなところって、ぶっちゃけると場末の酒場だ。あまりお行儀のいい人種が集まる店ではない。というか、その逆。大体罵声が絶えないといえば、程度も知れようというもの。私はここで、たまにちよつとした用心棒を気取つてみたりもする。

どれだけあり得ないことか、分かるだろう。供も付けずに一人とか。一瞬影武者かと思つたけど、本物だった。いや駄目だろう、一人でふらふら歩いていい人間じゃないだろう。

気づかれないように注意を払いつつ、ちらりと見やる。何かを探しているような素振り。探し物はすぐに知れた。

なんだ。どうせ気づかないと高をくくっていた私が悪かったのか。いやしかし。普通、向こうが私の顔を知ってるなんて思わないだろう。何しろ避けていたし。どこで見えていたやら。

ああ、だけど。

そういえば私は、この男の仇敵なんだった。じゃあしょうがないか。

何となく目が合った、ような気がした。いや、もう一步踏み込んで言うなら、氷蒼色が私を捉えたような気がしたというのが、多分正しい。ただ目が合っただけではなくて、それは、つまり。

気のせいじゃなかった。

まっすぐにこちらを見据えて歩いてくるその姿を、私はどこかで諦めながら見上げていたように思う。ここ、結構気に入ってたんだけどなあ。歌姫が。

さざ波のように音が消える。普段は喧騒に満ち満ちた店内に、今は静寂ばかりが沈む。誰も息を呑んでいるのだ、と認識する。

甘い高音も柔らかな低音も、今は響かない。そのことが無性に腹立たしい。ここには歌を聞きに来ていないのに。

私は、私の邪魔をする人間が大嫌いだ。できれば一つのことだけに集中したいのだ。つくづく接客業に向いていない性格だと、自分でも思う。よくコンビニのバイトなんてできたものだ。でもそれは今はどうでもいい。問題は。ああ、大問題だ。

かつ、と小さく踵が打ち鳴らされて、男が目の前に立った。

やる気もないけど見上げる、その顔は。冷たいアイスブルーの瞳と、色味の感じられない銀の髪。いつそ冷たすぎるくらいに整った、伶俐な容貌。別の人種だって言われたら信じるくらい、ちょっと見ないような美形。無駄に背が高い。にくい。ちょっと分ける。じやなくて。

何故、私の目の前に国王が立っているのか。そりゃあ、いくら荒くれ者でならした連中だって、借りてきた猫になるのも当然だけれど。それとこれとは話が別。王の自覚はあるのかとか、供はどうしたとか、その辺は実はどうだっていい。王国のことなんて興味もないし、優先すべきはいつだって己の感情だ。感傷とも言う。なんていうかこの場から逃げ出したい。三十六計逃げるにしかず。いや、それは叶わなくとも、とにかく切実に視線を逸らしたい。しかしそれをすると何か敗北した気になるのでしない。

こうなったら根競べだ。どちらが先に視線を逸らすか。

結論から言うと、勝負は付かなかった。

見上げた先で、それはそれは嬉しげに男が笑ったからだ。愉悦の

ような、しかし、どこか奇妙に安堵の入り混じったような表情で。その意味を問うより先に、私の耳はとんでもない爆弾発言を聞いた。残念ながら聞いてしまった。

「以前この付近で姿を見かけて以来、ずっとあなたを探していました」

「一目で恋に落ちました。私と来てはくださいますか？」

やたらと甘い声。にこり、微笑む顔はそれはそれは胡散臭い。ああ、こういうのが腹黒そうな笑顔っていうのかと何となく思った。差し出された手は、拒まれることなど想定していないようだった。けれど、その視線は射抜くような、と評するのではまだぬるい。そう。これは射殺すような、と呼ぶべきだ。私も、笑った。それなら私が取るべき行動は決まっている。もう、逃げようという気は起きない。

「ええ、いいですよ」

ええ、どこへでも行きましょう。行き着く先などどうせ決まっているのだから。

そうして私は、男の手を取った。

ところで、そういえば、あの目にはっかり気を取られて忘れていたんだけど。私、王様の顔がとっても駄目なんだった。どうしよう。

二章(三)

ロードアイランドが田舎だ、というのは変えようのない事実である。

この世界の中心は、ロードアイランドにも隣接する帝国だ。それと比べれば、向こうは都会でこちらは田舎だろう。

文明レベルが中世相当だと言ったって、田舎と都会じゃ格段に差があるものだ。更に田舎は田舎でも、更にその中でも王都から外れるほど田舎になる。

もちろん、庶民と貴族でも雲泥の差だ。中世と言ったら日本なんか、まだまだ竪穴式住居が現役とかそんな時代なのだ。都から遠くなると、縄文時代の後が戦国時代だったりするのだ。というのはもちろん、比喩としてだけ。

逆に偉くなればなるほど外国の文化を取り入れているところも、どこでも同じらしい。

センチのそこ(と書いて魔王城と読む)が何というか質実剛健だというのは、単純に趣味の問題で華美を好まないだけらしいが。

家具に精緻な細工を施したり、何色も使って布に細かい模様を染め付けたりというのは、この国ではあまり見られない。結構シンプル。そういうのが盛んなのは、お隣の帝国の方だ。世界の中心だけあって広大な領土を擁しているので、ロードアイランドと隣接している辺りは田舎も田舎なんだそうだけど。

なんだけど、ロードアイランドにも例外はある。それがお貴族様方だ、というわけ。

中でも一番偉いのが国王サマで、私はそいつにとっ捕まったわけで、連れてこられた先は王城だったわけで。放り込まれた一室は、ロードアイランドとは思えないほどだった。

それだけなら良かったんだけど、世話を命じられたらしき侍女さんが何だか腕まくりまでして張り切っちゃって。その後のことはあまり思い出したくない……

というか。

あくまでも一目惚れで押し通す気なんだな。

国王サマは言いました。私の大事な人ですから、粗相のないように。実にいい笑顔だった。あいつ結構この状況を楽しんでるんじゃないのか。まあいいか。適当なところで切り上げて帰ることもできるし、敵情視察だと思えば。そんな大したことをするつもりはないけど、周囲にはちょっかいかけてみたいかも。

しかし円舞曲ワルツと言ったら私にとっては白いドレスで踊るものなんだが、生憎と白が似合わないんだよなあ。

というわけで結局、濃い青に落ち着いた。胸で切り替えされているたつぷりした布地の、いかにもなロードアイランド風。装飾らしい装飾はパフスリーブというか、ビショップ・スリーブ（要するに長袖のちようちん袖だ）くらい。そこに上着代わりの生成りを巻きつけている。……マントなのか、これ？

何となく、宗教画にでもなった気分。これが普段着だっていうんだから、お貴族様ってのは大変だ。

なんでワルツかって？

別にヒゲダンスでも何でもいいけどさ、語感が綺麗になって。私と彼らと、さて、踊るのはどちらなのか。

ちなみに実際踊れるのは盆踊りとジングスカンとマイム・マイムくらいだ。オクラホマミキサーは忘れた。あまりに昔のことすぎてキタキタ踊りってどんなんだっけ。

と思ったのでうる覚えの記憶で踊ってみた。

侍女さんに目撃されて苦笑いされた。忘れる。忘れてくれ。背後

から殴つたら記憶は消えるか。多分その前に命の火が消えると思う。体はフリーズしているけれど、脳内では高速で言い訳が飛び交っている。よりもよって何故ここでキタキタ踊り。

何故キタキタ踊りを知らない人に見られるはめになったかと言えば面白がって王様について来ちゃったからで、ついて来ちゃったのは見つかったからで、見つかったのは場末とはいえ王都をふらついでたからだ。

魔族の領域にいれば森という天然にして絶対の防壁があるのに、なんでわざわざそこを出て王都なんかふらついてたんだと言ったらあっちには娯楽が少ないからだ。めーちゃんのいない今こそ日本に戻ったって良かったんだけど、何となく王都の方を選んだ。その何となくのせいでこうなつたわけだ。こんな格好じゃなきゃ床を転げまわりたい。穴を掘って埋まりたい。

しかして侍女さんはプロの侍女であった。すぐに苦笑は消え、営業用らしき笑顔に切り替わる。その切り替えの早さが私も欲しい。

「お食事の用意ができました」

あれ、食事ってもしかして、早くも修羅場な感じですか。

二章（四）

「エンヤです。はじめまして」

八年ぶりに見た妹の姿は、八年前と比べてまったく変わっていないかった。というのは既に知っていたが、近くで見るとますます懐かしかった。髪が少し伸びただろうか。何せ八年も経っているので、いまいち細部はあやふやだ。

ロードアイランド風ではなく、帝国風のレースたつぷりふりふりひらひらなドレスがよく似合っている。別にものすごい美少女ってわけじゃないけど、なんかこう雰囲気可愛いというか、フェミニンな格好が似合うんだよねこの子。本人は趣味じゃないと言い張るが、でもこのドレス、どう見ても子供用だよな。デザインといい柄といい。

でもそれは仕方のないことで、要するに小さいから既製品はそれしか合わないのだろう。私は日本人女性の平均あるけど、それでもここじゃだいたい小柄な方だし。ならば一四〇センチ台の我が妹はもはや小動物レベルだ。

で、まあ、それは現実逃避である。

おねーちゃん、なんでめっちゃ睨まれてるのか分かんないな！

正確には分かりたくない。もう全然分かりたくない。妹の視線があからさまに仇敵を　　ああ、嫌だ。認めたくない。コイガタキを見る目だなんて。

でも駄目なのだ、この男だけは。どうしても。

渡すわけには、いかない。

たとえ可愛い妹だって、だからこそ。

どうしましたか、と国王が微笑む。このまま気づかないふりで通す気がこいつ。ええい、こんなエセ爽やか腹黒魔術オタクに妹を渡してなるものか。

今この時をもって、私の任務は敵情視察ではなくなった。必ずや妹の心をこの男から取り戻してみせる。

本当は背後からぶっ刺せば一発なんだけど、それはできない。何故なら死んだ人間は往々にして美化されるものだからである。

死んだ子はみんな良い子。だから駄目。面倒だが、ちまちまやっていくしかない。何せ妹のためだ。最後に笑ってくれるなら、悪にだってなつてやるとも。

それにはこのポジションは大変有効だ。せいぜい利用させてもらうぜ。後で泣きを見るなよ、はーっはっはっは！

とか心中で高笑いをしつつ、食事は大変重苦しい雰囲気の中進んだ。誰一人言葉を発しない。国王以外は。なんかこの男やたら世話を焼いてきてうざいんですけど。

いや、もちろん分かってる。ここで怪しまれればすべてが水の泡だ。私も恥じらいと初々しさを演出して応える。ガラスの仮面をかぶりなさい。ちなみに高校時代は演劇部に所属していた。照明だったけど。役者なんて一回もやったことないけど。だがしかしたかが照明とあなどるなけれ、演劇とは役者と音響と照明の三位一体が揃ってこそである。音響や照明もまた、ひとつの演技なのだ。

ところでガラかめって今どうなってるの？

そんな感じで適度にイチャついてる（ふりをしている）内に食事は終わった。いちいち世話を焼かれて食べた気がしない。もったいない。こんな高そうなお飯、久しぶりなのに。まあジャンクフード

やおふくろの味の方がずっと好きだけど。

というのも、全部現実逃避だった。

何かを言いたげに、見つめてくる瞳。食事の間中、向けられていたそれ。

でも私は、故意に無視をした。

今さらだ、今さら　でも、怖いんだよ。私は「おねーちゃん」で、この世界の何より泪が大切で。でも泪にとっては、そうじゃない。もうとづくに私は世界から切り離されていて、それは分かっているけど、分かっていたけど、分かってたつもりだったけど、やっぱりその時になってみれば痛いのだ。

たとえそれがとうの昔に失くしたものの、その名残にしか過ぎない幻肢痛でも。痛いものは痛いし、切ないものは切ない。さすがの私だってシリアスになっちゃうぞ。ボケのキレも鈍くなるぞ。いや、ボケにキレって明らかに矛盾しているが。どんなだろう、キレのあるボケ。

泪がゆっくりと口を開く。

私はただ、死刑宣告を待った。

「あなた、誰なんですか」

かつて私の世界のすべては、家族だった。

二章（五）

かつて私の世界のすべては、家族だった。

「あなた、誰なんですか」

誰と言っても、自己紹介は済んでいる。だから聞かれているのは名前でも経歴でもない。聞かれているのは立ち位置だ。

えーと、あなたのおねーちゃんです。とはもちろん、言わなかった。

少しだけ昔の話をしよう。まだ私が魔術なんて何ひとつ知らなかったところ。師匠　クロウが私に魔術を教えるにあたって、最初に言ったことだ。

「知れば帰れなくなりますよ」

帰れない。どこに？　元の世界にか。否。そうではない。

私ができる魔法はふたつだけで、ひとつはまがい物を量産すること。もうひとつは時間と空間と世界とを渡ることだ。そしてそれは、クロウから習った。

世界を渡る。イコール、元の世界にも行ける。

だから、そうではない。そして、もう一方では正しくもある。

世界を渡るということは、世界から切り離されるということだ。どこにでも行けるということは、どこにも所属できないということなのだ。

帰れるのではない。行けるだけだ。詭弁のようだけれど。

だって、世界から切り離されるといことは、なかったものになるということだ。

元の世界で、私の存在はなかったことになっている。泪は一人っ子で、姉なんていなかった。そういう風に、遡って改竄されている。だから私はもう二度と、父と母をお父さんお母さんと呼ぶことができない。私の名前を呼んでもらうこともない。私の部屋だって、元から設計されなかったことになっていた。

なかったものが帰るわけには、いかない。

おかげでこれまで買ったためた本やCDやDVDが全部パーだ。もう一回集めるはめになった。勘弁してくれ。中にはすごいレアなものもあったんだぞ。

資金に関してはまがい物量産というチート能力をフルに活用することで賄っているからいいが。まがい物と言うか本物とまったく同じ構成だから、これに関してはコピーと言うべきか。ちなみにやろうと思えばお札も量産できるけど、作ったところでそれはニセ札に過ぎない。何故ならコピーはできるけど新しいお札を作り出すことは不可能だから。型番的な意味で。

でもってうら若き女性が金の延べ棒とか持つてるのも変なんで、アクセサリ的なものを作っては質屋に売っている。一から作るにはオリジナルティが欠如しているので、適当に広告とか見てコピーしているんだけど。

ただ、本とかは作れないっばい。というか作ったら凄まじい落丁本になった。残念だ。だがしかしそれもそうか。わりかしイメージに頼っているとところがあるからな。ちなみに魔法は魔法なのでエタナルフォースブリザード的な術名とかはない。

でもまあそれはどうでもいい。人に言ったら瑣末瑣末って笑われるくらいの些細だ。けして自慢とかではない。宝くじで三億円当て

なくてもヒキニートできるとか、それ自慢にならないから。むしろ社会の底辺だから。

まあそんなわけで、姉妹の名乗りを上げるわけにはいかない。仕方がないので、私はあからさまに白々しい嘘をついた。

「私ですか？ ええと、一応レオナルドとは恋人ということに、なるんでしょうか……？」

国王も白々しく笑って、その先を続けた。

「エンヤは本当に謙虚ですね。もっと自信を持っていいんですよ？」

しかし本当に気持ち悪いな。誰この人。

正直やめてほしいがそういう設定なので仕方ない、薄っすら頬を染めてやる。ちょっとこころ血流を増やしたいな、なんて時にも使えます。どんなシチュエーションだそれはと思っていたが、今ここで使うとは。事實は小説よりも奇なりとはよく言ったものだ。

「そ、ですか」

「ええ」

うん、一応。まことに遺憾ながらそういう設定になっている。頭に「ニセの」とか「化かしあい真っ最中の」とかそんな感じの修飾がつくけど。それでも本当勘弁してほしいけど。でもおねーちゃん頑張るよ、泪の幸せのためにも！

そりゃあ、私だって国王のやつが土下座してでもお嬢さんを僕にくださいっていうんなら考えてやらんでもないけどさ。だけどそうじゃない。

「そう、なんだ……へえ」

うん、でね、あのね、そういうわけなんで、おねーちゃん心が折れそうになるからそう睨むのやめて欲しいな。ほんと、ぽっきり行くから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9445g/>

タイラントと異界の魔女

2011年7月17日21時49分発行